

美術館における未就学児の鑑賞教育について

稲垣立男

●要約

この研究では、これまで美術館の鑑賞教育では対象とされていなかった未就学児について着目し、理論面、実践面においてその可能性を探るものである。美術や教育の現場において乳幼児の感覚や能力についてどのような評価がされ、実際のプログラムに反映されてきたのか、また国内外の美術館、あるいは保育園、幼稚園などの教育機関で実施されている鑑賞教育プログラムについての実態を調査し、将来この分野で美術館の担っていくべき役割について検証する。

●キーワード

未就学児

鑑賞教育

美術館

教育普及

コミュニティー

● 章節構成

はじめに

1 未就学児の鑑賞教育

1-1 美術館鑑賞教育における未就学児教育の位置づけ

1-2 未就学児の能力と鑑賞教育

1-3 研究方法について

1-4 研究計画について

2 未就学児鑑賞教育の現在

2-1 東京都現代美術館『ひよこツアー』

2-2 森美術館『おやこでアート』

2-3 水戸芸術館現代美術ギャラリー『赤ちゃんと一緒に美術館散歩』

2-4 岡山県立美術館『MITE!おかやま』

2-4 テート・モダン 常設展示室

2-5 ケトルズ・ヤード エデュケーション・ルーム

おわりに

付記 稚内未来画

参考文献

はじめに

以前は作品の収蔵管理が中心であった美術館の活動は、近年になって来館する観客に対するサービスが充実し、独自の企画展や教育普及のためのプログラムがごくあたりまえに実施されるようになってきている。また、美術館における教育普及活動の取り組みの中で、小中高生を対象にした美術鑑賞やワークショップ等の様々な取り組みが多数実施されており、一方教育現場においても、美術館を活用した鑑賞教育についての様々な提案がなされるようになってきている。美術館関係者の間でも鑑賞をテーマとしたシンポジウムや研修会が多数開催されるようになり、美術館における公的なサービスのあり方に関する議論が盛んになっている。

そのような変化の中、これまで鑑賞教育ではあまり対象とされていなかった未就学児について、理論面、実践面において将来的な可能性を探る。これまで乳幼児の感覚や能力についての評価はどのようなものであったのか、また国内外で実施されている未就学児鑑賞教育についての実態を調査し、美術館の担っていくべき役割について検証する。これらの調査を基に、子どもの創造力やコミュニケーション能力を開発するワークショップを提案し、その効果について検証・研究を進める。さらに美術館や地域との連携についての課題や、施設の改善点なども検討する。

1. 未就学児の鑑賞教育

1-1 美術館鑑賞教育における未就学児鑑賞教育の位置づけ

今日、コミュニケーションの場としての美術館が注目されてきており、大きな役割が期待されている。館主催による友の会などの活動、ボランティアスタッフによるガイドツアー、実践的なワークショップなど、観客との「双方向」のプログラムもさかんになってきており、成功を収めている例も多い。また子どもを対象とした鑑賞教育を休日や夏休みなどを利用して積極的に実施している館も多く、近隣の小中学校の授業と連携した教育計画も実践され始めている。創作が中心であったこれまでの美術教育に対し、美術館などの施設の積極的な活用により、子どもたちにとって多様な体験の可能性が広がってきているといえる。

一方で、乳幼児などの小学校就学前までの子ども（未就学児）についてのプログラムを実施している美術館は現在ほとんどなく、近年の発達心理学における研究で幼児期における観察能力、鑑賞能力が客観的に検証されつつある中であって、美術館における乳幼児向けのワークショップはまだまだ発達段階にあり、その方法については手探りの状態であるともいえる。また、少子化や地域コミュニティの喪失した中での子育て支援といった社会的な問題から、新しい教育・コミュニケーションのための環境の提案が広く求められており、この年代に対応したプログラムや施設の充実を図ることは美術館にとっても重要な課題となってくるだろう。



美術館のエデュケーション・コーナー (The Centre for Contemporary Arts グラスゴー)

1-2 未就学児の能力と鑑賞教育

これまで「途方もなく騒がしい、大いなる混沌」とされてきた乳児の世界観（ウィリアム・ジェームス、1890）は、現在では「言葉を発するずっと前から嫉妬や共感、欲求不満といった複雑な感情をマスターし」「微細な際を見分ける認識力があり」「ばらばらに分離した母親の顔写真と普通の写真とほぼ同じ早さで認識できる」（パット・ウィンガード、マーサ・プラント「0歳児の超能力」Newsweek、第20巻38号、p44 2006年）とされ、国内外の研究機関での乳幼児の感覚・能力の研究も進んでいる。子どもたちの能力への理解をベースとした教育研究のいっそうの進化が望まれている。

研究者自身も就学児や成人向けに美術館で体験ワークショップなどを実践してきたが、さらに一歩踏み込んだ「核家族化社会において育児に関する様々な疑問に答えてくれる」「育児や子育て期間の様々な悩みを交換する場所」（大塚和義「新版博物館学・現代社会と博物館」日本放送出版協会、p197 1995年）といった子育てと結びついた機能も地域社会から求められている。こうしたことから、乳幼児向けのプログラムという新しい分野での積極的な研究と実践が期待されている。

1-3 研究方法について

この研究の学術的な特色としては、美術館における体験プログラムを通じた未就学児の美術や美術作品の直接的な体験を通じた様々な能力開発の可能性を探ることにある。そのためのベースとして博物館学、教育学、言語学、医学、心理学、環境学など横断的な学術研究が必要となる。また、本研究では研究の基礎となるまとまった形の研究資料がほとんどないため、研究を着手する上で、基本的な資料の収集と実地調査が不可欠である。そのためにまず、鑑賞教育や乳幼児の発達研究に関連する文献資料を幅広く収集し、分析していく。また、実際に国内外の美術館や保育・幼児教育機関などにおける鑑賞教育の実態を詳細に調査・把握し、関係者への聞き取り調査などを行い、それを分析、理論化していく必要がある。よって、このような包括的な調査を伴う研究を個人で行うことは難しく、分野の違う複数の研究協力者が必要である。

1-4 研究計画について

この研究は花王芸術文化財団とトヨタ財団の助成を受け、平成18年度より2年の計画で実施されている。

研究1年目では、文献資料の収集と分析、また各地の美術館などの現地調査を行う。文献資料は、鑑賞教育、発達心理学、幼児教育に関する国内外の書籍の収集とその分析を行う。また現地調査としては、鑑賞教育に積極に取り組んでいる国内外の美術館、保育・幼児教育機関などを対象に調査・研究を行う。国内では東京都現代美術館、森美術館（東京）、水戸芸術館（茨城）、海外ではテート・モダン（イギリス）、ケトルズ・ヤード（イギリス）などを調査し、実際の鑑賞教育プログラムを見学、ミュージアム・エドゥケーターやアーティストなどの関係者や実際にワークショップを体験した子どもたちからプログラムの実態について聞き取り調査する。また教育学、言語学、医学、心理学、環境学などの分野で、乳幼児に関する研究を行っている各教育機関からの情報収集もあわせて行う。

研究2年目では、引き続き子ども博物館（イギリス）、ニューヨーク近代美術館、ブルックリン美術館（アメリカ）などを調査、さらに文献と現地調査による研究に加えて、収集したデータの分析、まとめ、

理論化を行い、効果的なワークショップや鑑賞教育の方法をさぐり、実践してみる。実践したものの効果をさらに検証・分析し、より良い方法を検討していく。

これらの研究成果を美術館の現場へフィードバックすることが、もっとも重要であると考えており、将来的には、研究結果を実際の鑑賞教育の現場で活用できるように日・英のバイリンガルの報告書を作成し、現状の理解を深めると同時に、提案したワークショップやその他の鑑賞教育プログラムを美術館と連携して実施し、将来のさらなる研究に発展させていきたいと考えている。

2. 美術館における鑑賞教育の現在

現在、様々なタイプの鑑賞教育プログラムが美術館で実施されているが、それらのうち未就学児向けのものについて、私の3歳になる長男とともに参加してみた。またプログラムを実施した各館の教育普及事業の担当者の方々から、プログラムの詳細に関するお話をお伺いした。それと同時に、未就学児向けではないが、参考となると考えられる試みについても幾つか参加してみた。それらのプログラムの具体的な内容に関して報告する。

2-1 東京都現代美術館『ひよこツアー』

場所 東京都現代美術館常設展示室（東京）

企画 MOT コレクション 第3期 1940－1980年代以降の美術

特集展示「みんなのなかにいる私」（会期 2006年10月14日－12月24日）

内容 小さな子どもと一緒に親子で解説を聞きながら展示室をめぐるツアー

対象 乳児（0～2歳） 幼児（3～5歳）

日時 乳児の日 11月15日（水）、12月6日（水） 11:00～

幼児の日 11月25日（土）、12月16日（土） 11:00～

東京都現代美術館では、1995年の開館時から教育普及事業に力を入れており、大人から子どもまで、さらには近隣地域や視覚、聴覚障害の方々向けのものなど、多角的なプログラムを実施している。子ども向けには『子どもと家族のためのプログラム』と学校向けの『スクールプログラム』を企画展示や常設展示の入れ替えに併せて実施している。同館では未就学児向けに特化したプログラムはこれまで実施してこなかったが、2006年11、12月に乳幼児とその家族と一緒に鑑賞するプログラムを初めて実施した。『ひよこツアー』というこのプログラムにおいて、最も大切なことは『「お母さんと一緒に見た」という体験』（MOT スタッフブログ 2006年12月10日 <http://www.mot-art-museum.jp/blog/staff/>）であるというように、美術館で作品を観るという体験をわかりやすいキーワードを使って組み立て、参加した子どもたちが家族とともに楽しめるプログラムを目指している。

2006年11月25日に実施された『ひよこツアー』の幼児の日に、息子と参加した。まず、地下のスタジオに集合、スタジオで担当する学芸員から子どもとその親に対して美術館でのマナーやルール（大きな声を出さない、作品に触らないなど）の説明があり、その後子どもたちの自己紹介をした。当日のツアーのテーマは「家（いえ）」であり、家に関する絵本どみ聞かせがあった。その後常設展示室に移動、荒木珠奈の作品「Caos poetico（詩的な混沌）」を観ながら、「一番大きな家は？」「一番窓の多い家は？」など、

家の窓の数や色、かたちなどについて子どもたちとやりとりをしながら、担当の学芸員から作品の解説を聞く。荒木作品の見学の最後に、ひとりひとり作品を手にとって、プラグに接続して明かりをとしました。

その他にモンティエン・ブンマー「呼吸の家」などの作品を、家と関連させながら鑑賞した。最後にスタジオに戻って、荒木の作品をモチーフとした作品制作を行った。あらかじめ準備してあった、家の形をした小さな箱（中には豆電球と電池が仕掛けてあり、明かりがつくようになっている）に子どもたち自身が色紙やセロファンを貼付けて彩色し、ひとりひとりの家を制作した。制作した作品はそれぞれが記念として持ち帰った。

2-2 森美術館『おやこでアート』

場所 森美術館（東京）

企画 「アフリカリミックス」（会期 2006年5月27日－8月30日）

内容 ベビーカーに乗っている赤ちゃんから小さな子どもまで親子でアートを楽しむツアー

日時 2006年6月28日（水）7月15日（土）8月23日（水） 各回11:00－12:00

対象 未就学児（0～6歳）とその保護者

森美術館では2003年の開館当時から「パブリックプログラム」を実施しており、企画展ごとに幅広い鑑賞者を対象にギャラリー・トークや館内ツアーを行う『一般プログラム』、また、保育園・幼稚園から大学、専門学校までの学生や先生を対象とした『学校プログラム』、港区内を中心に児童館や福祉会館といった地域の施設と連携し、コミュニティーに根ざした活動を行う『コミュニティー・プログラム』、さらにそれらの上記のプログラムのサポートスタッフを育成する『サポートスタッフ・プログラム』などを実施している。

『おやこでアート』は展示鑑賞プログラムの一環として開館以来実施されており、『ベビーカーに乗っている赤ちゃんから小さなお子様まで』（森美術館・パブリックプログラムパンフレットより）の親子連れで美術鑑賞を楽しむ内容となっている。2006年7月15日に、この『おやこでアート』に実際に参加してみた。参加当日は8組16人の参加があり、ベビーカーで移動する乳児組（バギー・チーム）と、歩いて鑑賞する幼児組の2組に分かれてツアーを行った。はじめに、このツアー自身は子どもの鑑賞教育ではないというアナウンスがあった。これは、海外の美術館（ニューヨーク近代美術館）で実施されている『バギーツアー』をモデルとしたもので、赤ちゃん連れのお母さんが気軽に美術館を鑑賞できるようにと始まったものであって、あくまでも子どもに特化したプログラムではないということである。ガイドはボランティアのスタッフで実施され、親に対して作品解説を行う。バギー・チームは親のペースで鑑賞が進行していくが、歩いて鑑賞するチームは子どものペースになる傾向がある。

参加者からの感想としては、バギー連れの親はこのような機会がないとゆっくりと美術館を楽しむことができないので、リピーターも多いとのことである。一方、子どもが歩いて鑑賞する幼児連れの参加者からは、大人向けだけでない、子どもも一緒に楽しめるようなものを期待する声もあったようである。



森美術館 おやこでアート（写真提供：森美術館）

2-3 水戸芸術館現代美術ギャラリー『赤ちゃんと一緒に美術館散歩』

場所 水戸芸術館現代美術センター（茨城県水戸市）

企画 佐藤卓展「日常のデザイン」（会期 2006年10月21日～2007年1月14日）

内容 係員が付き添い、解説しながら子どもと一緒の鑑賞をサポートします。

日時 2006年11月10日、24日（いずれも金曜日） 10時～11時

対象 未就学児とその保護者

水戸芸術館現代美術ギャラリーは、学芸員によるギャラリー・トーク、アーティストによる造形ワークショップ、講演会、学校向けのプログラムなど、企画展の会期に併せて様々な教育普及活動を行っている。同館は1995年に特別研修会「ミュージアム・エデュケーションの理念と実際」を開催、また1999年には対話型鑑賞教育をテーマとした展覧会「なぜこれがアートなの？」をアメリカ・アレナスと国内の他2館と共同で企画しており、教育普及活動との縁の深い美術館である。今回参加した『赤ちゃんと一緒に美術館散歩』は、未就学児とその保護者を対象としたプログラムで、美術館スタッフとともに展覧会を親子で鑑賞できる機会を提供している。同館では以前に託児付きの鑑賞プログラムを実施していたが、子どもと一緒に鑑賞できるようなものを、というリクエストが参加者からあり、このプログラムは始まったそうである。

2006年11月24日に実際のプログラムに参加した。館内の休憩室に集合、スタッフの方や他の参加家族とお話をしたり、おもちゃや絵本を読んだりしてスタートを待つ。参加者全員が集合したところで、その日行うツアーの説明があり、一緒に展覧会を廻る担当のスタッフが紹介され、親子1組に1人スタッフがつく。各家族がそれぞれスタッフと一緒に休憩室から出発、企画展示室に向かう。私の家族の場合、子どもが自由に興味を持つものを中心に観ていって、それに合わせて移動しながら作品解説



水戸芸術館現代美術ギャラリー 赤ちゃんと一緒に美術散歩 休憩室



水戸芸術館現代美術ギャラリー 赤ちゃんと一緒に美術散歩

をしてもらうという感じで鑑賞することになった。一方バギーで廻っている家族は、大人中心の鑑賞ということになる。その辺りはマンツーマンということで、子どもの年代によってそれぞれのペースに合わせて鑑賞ことができる。子どもがよく知っている牛乳パックが子どもよりも大きいサイズに巨大化されて展示されていたり、NHK 教育テレビ『にほんごであそぼ』でお馴染みのグッズがおかれていたりして、子ども自身にとっても興味のわく展示内容であったせいか、展覧会を楽しんでいる様子である。

鑑賞の最後には、館の中庭に設置されている展覧会の看板の前で、ポラロイドカメラで写真を撮ってもらった。写真は参加者それぞれにプレゼントされた。鑑賞が終わってから休憩室に戻り他の参加者やスタッフと談笑する時間があり、このようなプログラムとしてはゆっくりとした時間を過ごすことができた。

2-4 岡山県立美術館『Mite! おかやま』

場所 岡山県立美術館（岡山県岡山市）

企画 MITE! おかやま（会期 2006年7月21日－8月20日）

内容 アメリア・アレナスによる対話型

日時 2006年7月22日（土）14:00－

対象 一般

岡山県立美術館の教育普及活動は、様々な年代を対象とした講座やワークショップで構成されてい

る。『MITE! おかやま』は、鑑賞教育に焦点を当てた展覧会で、会期中はボランティアスタッフによる鑑賞教育ツアーが毎日開催される。この展覧会を企画・構成したアメリア・アレナスは、84～96年にニューヨーク近代美術館の教育部でカリキュラムを担当、その鑑賞教育に関して第一線で活躍しており、日本においても各地で実施しているギャラリー・トークや講演会、対話型鑑賞教育に関する著作でよく知られた存在である。

『MITE!』は、未就学児を対象としたものではなく、アメリア・アレナスがニューヨーク近代美術館の教育普及担当であったときに実施された対話型鑑賞プログラムを展覧会に反映させたものである。アレナス自身のギャラリー・トークが7月22日に開催され、2セッション行われた両方に参加した。展覧会会場の作品にはいわゆる「キャプション」のようなものがなく、作品がゆったりとした展示会場となっている。前半は一般の観客を中心に、後半は学生を中心にギャラリー・トークは行われた。アレナスが先導して展示作品について、様々な質問を観客に尋ねていく。その答えに呼応して、またアレナスが話を展開していく。作品について思考し、観客個々の作品に関するストーリーを自分なりに組み立てていく作業を、対話を通じて行っていくというコンセプトがよくわかるプログラムである。

2-5 テート・モダン 常設展示室

場所 テート・モダン 常設展示室（ロンドン）

日時 2006年8月24日（木）

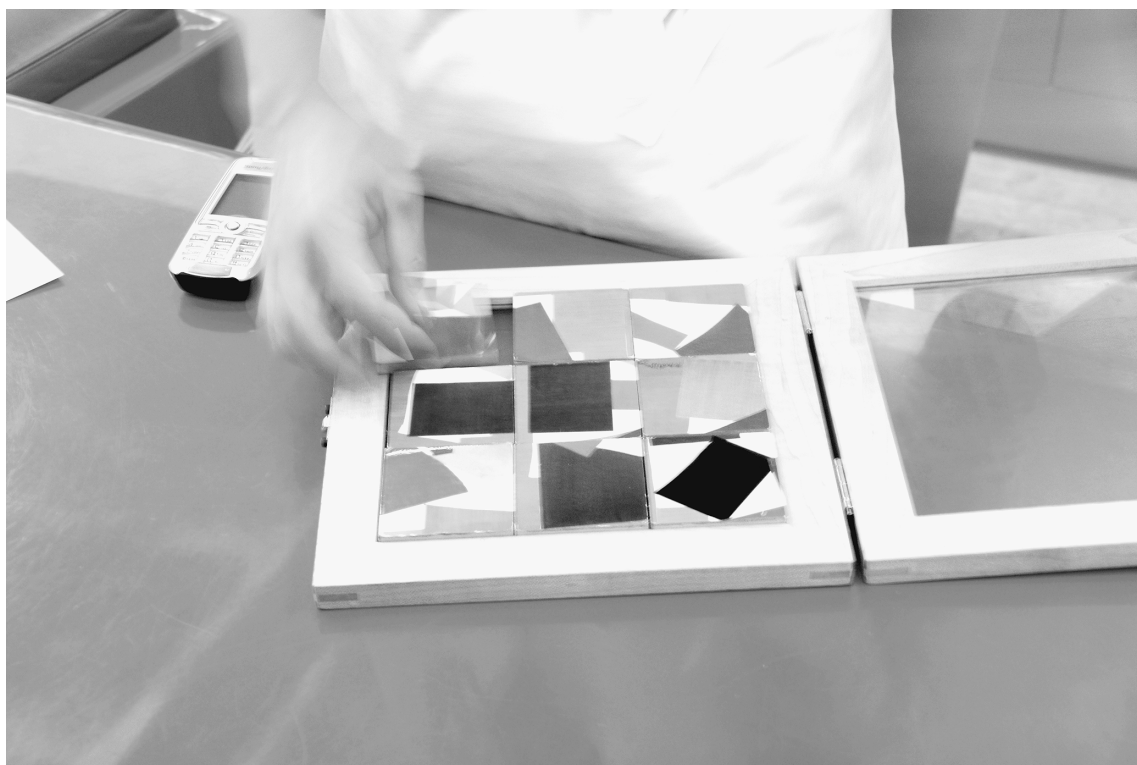
テート・モダンの常設展示室は、イギリス国内ならず、海外からも多くの人々が訪れるということもあって、様々なバックグラウンドの観客に対応できるように工夫されている。子ども向けには、展示室の入口に「START, games for families」というブースがあり、そこで子どもたちはエドゥケーターから作品に関係したパズルやゲームなどのグッズをもらうことができる。そのゲームやグッズをもって作品のある場所まで行き、家族の助けを借りながら、ゲームを進めていく。

今回は2回参加したのだが、1回目はマティスの絵のパズルをもらい、それを絵の前に持って行ってパズルを組み立てるということをした。実際に本物の絵を前にして、2回目は人間の脳をクローズアップした絵の描かれている台紙と、雲やその他のシールを渡され、それをマーク・ロスコの複数の作品が展示されている展示室で、1枚の絵を観て、その絵から受けた間隔や印象に近いシールを台紙に張っていくというもの。

両方のゲームとも、実際に家族で作品の前に行って実施するので、エドゥケーターは子どもを展覧会に連れて行った家族自身ということになる。子どもたちには楽しくゲームを媒介としながら鑑賞したり、また作品をスケッチや模写したい人のために椅子が準備されていたりと、やり過ぎなのではと思うぐらいに個人個人の鑑賞のスタイルが自由に設定されている。その懐の広さは、子どもから大人まで、様々な年齢層の人間が一つの場所で共存していたかつての地域コミュニティの姿を思い起こさせる向きもある。



テート・モダン 常設展示室前の「START, games for families」のブース



テート・モダン マティスの絵のパズル



ケトルズ・ヤード エデュケーション・ルーム



ケトルズ・ヤード エデュケーション・ルームの利用の様子

2-6 ケトルズ・ヤード エデュケーション・ルーム

場所 ケトルズ・ヤード エデュケーション・ルーム（ケンブリッジ）

日時 2006年8月26日

ケンブリッジにあるケトルズ・ヤードは2つの建物から構成されており、ひとつは、テート・ギャラリーのキュレーターであったジム・イードのコレクションを紹介していて、旧宅にコレクション作品が飾られている状態をそのままギャラリーとして開放している。もうひとつは現代美術専門のギャラリーで、小さなスペースではあるが、企画展が充実していることで知られており、ギャラリー・トークなどの鑑賞プログラムもよく行われている。子どものためのエデュケーション・ルームは現代美術ギャラリーの一角にある。ギャラリー同様、それほど広くない部屋がいわば図工室のようになっており、材料、カラーペンやクレヨンなどが机や棚に置かれていて自由に子どもたちが創作できるようにしている。子どもたちの制作した作品が壁や棚の上に置いてあって、楽しい雰囲気である。

息子と一緒にこのエデュケーション・ルームを利用してみた。色紙を1枚もらい、シールやクレヨンを使って、絵を描いてみた。きらきらと光るラメのシールを気に入ったようで、画用紙の上にたくさん貼っていた。他にもう一組の家族が利用しており、お父さんとお母さんは順番にギャラリーで作品を観ていた。ギャラリーと隣接した場所にこのようなスペースがあることで子どもたちはこの環境の中に入ること、ある程度自由に制作することができるようになるだろう。また、子ども連れでギャラリーを訪れた親が作品鑑賞の間、子どもを遊ばせる空間としても一役買っているに違いない。

おわりに

私自身、美術館やギャラリーを訪れる機会が多いのだが、自分の子どもと一緒に訪れるようになってその環境が気になるようになった。赤ちゃんや幼児は行動に予測がつかないこともあって、制限の多い美術館や劇場などの文化施設を利用しにくい状況ではあるが、現在未就学児向けの鑑賞プログラムを提供している各美術館が様々に工夫して、その困難さを解消しようとしている。ただ、美術館は公的な空間であり、他者と空間を共有するということを学習する場でもある。他の観客の鑑賞環境の配慮や作品の保全などの問題をどのように解消していくかということは常に問題となる部分であろう。そのためには美術館やギャラリーが観客に対して、どのような環境やサービスを提供したいのか、方針やコンセプトをよりはっきりと打ち出すこともより重要になってくると考えられる。

子どもたちにとって理想的な作品との関係を想像してみると、作品に対して自由な発想、自由な見方ができるようになることが、多様な価値観を持った、ゆたかなコミュニケーションの可能性を引き出すことになると考えられる。ゆえに鑑賞はこうあるべきだと定義づけることは本質的ではなく、時代や物の見方によって作品の価値が変化するように、鑑賞のありかた自体も変幻自在で多様であることが正解ではないだろうか。

岡山県立美術館でのアメリカ・アレナスのギャラリー・トークの後、彼女にインタビューすることができたが、アレナスによると2、3歳までの幼児は、子ども同士でコミュニケーションをとって組織的には動くことができないため、子どもたちだけで何かをすることは難しく、鑑賞する際に作品と子どもをつなぐ媒介が必ず必要であるということである。子どもたちは人や装置を媒介にして作品の

存在に気がつき、その意味を自分なりに考えていくという鑑賞方法となる。また、アレナスは、未就学前の子どもは1年1年、その能力が劇的に変化していくので、年齢ごとにプログラムを組み立てていく必要があるということである。これらの事柄に関して、例えば美術館を訪れた際の作品と子どもとの間の媒介役、年齢や個性に応じた鑑賞についての提供など、やはり親や家族が大きな役割をはたすことになるであろう。例えば、子どもと一緒に訪れた親や家族が、子どもたちのファシリテーターとなるようなプログラムを考えてみてはどうであろう。

この研究は現在進行中であるが、今後の目標としては、未就学児の感覚・能力についての認識をさらに広げ、それらに基づいたワークショップなどの体験プログラムを開発し、実施に結びつけることである。このような試みについての、対象を見つめる視点の広がりやコミュニケーション能力、情感の豊かさといった教育的効果に関することと同時に、地域における子育て支援といった観点から、公共としての美術館の機能を広げる可能性について探っていきたいと考えている。

附記 稚内未来画

稚内北星学園大学の発行する本紀要では、2000年の創刊以来、稚内の産業や文化をテーマとした付録を冊子の巻末に添付している。この付録は大学の活動がこの地域に根ざしたものであることを明示し、大学と地域の人々を結ぶひとつの試みである。2007年度版付録については、大学紀要委員会よりそのアイディアについての依頼があり、委員会の方々と議論を重ねた結果、この機会に地域の子どもたちとのコラボレーションができないかということになった。大きな1枚の画用紙に子どもたちが共同で自分たちの未来の姿を描く『稚内未来画』という企画を考え、大学から一番近い稚内富岡幼稚園にお願いしたところ、快く引き受けてくださり、同園の子どもたちが共同で描いた自分たちの未来の姿の絵を掲載することになった。



全員集合してくれた稚内富岡幼稚園の子どもたち



稚内富岡幼稚園での制作の様子

2006年12月13日に導入のためのワークショップを同園で実施した。副園長の石橋先生が主導して、まず、子どもたちの未来に関するお話をイラストを交えながら楽しくしてくださった。その後子どもたちがクラスごとに順番に、画用紙に向かって画を描いていった。最後にみんなで体操して、ワークショップを終えた。その後同年12月25日まで園に画用紙を預かっていただいて各クラスを巡回、さらに描き加えてもらった。

制作の手順

大きな画用紙 (1M × 1.5M) とクレヨンなどの描画材を準備。

みんなで絵を描く。テーマは「みらいのわたし」

分けられた絵の一つ一つがその記録とともに巻末に添付される。

描かれた「稚内未来画」は550等分(紀要の発行数)される。

子どもたちの描いた未来の姿から、私たちの想像よりもずっと先の未来を発見することができるかもしれない。稚内の子どもたちの未来画は大学紀要とともに国内外に広がり、様々な人々の手に触れられることだろう。そして、冊子の所有者がたまたま出会ってお互いの持っている画のピースを比べあうようなこともあるかもしれない。あるいは子どもたちが何十年か後に大人になったときにこの本に再び出会うというようなことも期待している。このプロジェクトを通じて、人と人が繋がる、有機的な場が提供できればと考えている。

●参考文献

- レッジョ・チルドレン：子どもたちの100の言葉　－イタリア/レッジョ・エミリア市の幼児教育実践記録学習研究社
2001年
- ジョアンナ・ヘンドリック、石垣 恵美子、玉置 哲淳：レッジョ・エミリア保育実践入門－保育者はいま、何を求められているか　北大路書房　2000年
- 山本朝彦、菅章、仲野泰生：美術鑑賞宣言　－学校+美術館　日本文教出版　2003年
- 上野行一：まなごしの共有　－アメリカ・アレナスの鑑賞教育に学ぶ　淡交社　2001年
- 佐藤学、今井康雄：子どもたちの想像力を育む－アート教育の思想と実践　東京大学出版会　2003年
- ウド・リーベルト、長田謙一：芸術あそび　－ワークショップつくるみる美術ハンドブック　日本文教出版　1998年
- ローリー・カールソン、亀井 よし子、芹澤 恵：小さな芸術家のための工作ブック　プロンズ新社　1997年
- アメリカ・アレナス、福 のり子、川村記念美術館：なぜ、これがアートなの？　淡交社　1998年
- アメリカ・アレナス：みる・かんがえる・はなす。鑑賞教育へのヒント。　淡交社　2001年
- アメリカ・アレナス、木下 哲夫：人はなぜ傑作に夢中になるの－モナリザからゲルニカまで　淡交社　1999年
- 片桐頼継、アメリカ・アレナス：よみがえる最後の晩餐　日本放送出版協会　2000年
- アメリカ・アレナス：MITE! ティーチャーズキット 〈1〉〈2〉〈3〉　淡交社　2005年
- エリ・エスヴィゴツキー、広瀬 信雄、福井 研介：新訳版子どもの想像力と創造　新読書社　2002年
- ハーバート・リード、宮脇 理、直江 俊雄：芸術による教育　フィルムアート社　2001年
- 福田隆真、茂木一司、福本謹一、宮脇理：美術科教育の基礎知識　建帛社　2000年
- 若元澄男：図画工作・美術科－重要用語300の基礎知識　明治図書出版　2000年
- 竹内博、春日明夫、長町充家、村田利裕：アート教育を学ぶ人のために　世界思想社　2005年
- 金子一夫：美術科教育の方法論と歴史　中央公論美術出版　2003年
- 秋田喜代美、佐藤学、恒吉僚子：教育研究のメソドロジー－学校参加型マインドへのいざない　東京大学出版会　2005年

●参考 URL

- 東京都現代美術館 <http://www.mot-art-museum.jp/>
- 森美術館 <http://www.mori.art.museum/jp/index.html>
- 水戸芸術館現代美術ギャラリー <http://www.arttowermito.or.jp/art/gallery-j.html>
- 岡山県立美術館 <http://www.pref.okayama.jp/seikatsu/kenbi/index.html>
- テート・モダン <http://www.tate.org.uk/modern/>
- ケトルズ・ヤード <http://www.kettlesyard.co.uk/index.html>

●英文タイトル

Study on Educational Programmes for Preschool Children in Art Institutions

●英文要約

This research draws attention to educational programmes for preschool children in art museums and galleries, the age group that has long been excluded from their target group. It aims to explore both theoretical and practical possibilities of such programmes for preschool children through direct observation and fieldwork as well as studying written sources. It will reinvestigate some historical studies and practices in regards to the development of senses and ability of babies and infants in the field of art and education.

